学園だより

Vol.71

2003.7
Nara Women's University

夏雲と記念館（文学部 武藤康弘助教授）

あいさつ 1
学長 久米健次
シリーズ　情報と人間を考える 3
島社会での情報環境激変と学問
長嶋俊介
教養広場　Liberal arts Forum 5
「教育を語る言葉」を語る
西村拓生
化学アカデミックガイダンス『分子を見る!』に参画して
岩井　薫
ヘアカラーしてますか?
前川昌子
寄稿　私のチャレンジ 7
久世芙美・竹中弘枝・伊藤海織
海外訪問記 11
中国内モンゴル自治区の黒河下流域調査 相馬秀廣
英国滞在記　2000.10.1-2001.7.31 上江洲 達也
ユネスコ信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクト 増井正哉
新任教官紹介 14
新任部局長紹介 15
学生生活案内 15
平成16年度に向けての就職セミナーの日程について
生活環境学部新入生合宿研修
日本育英会奨学生受領資格の確認について
後期授業料免除について
学生相談室について

奈良女子大学

現場を忘れないトップダウン 全体を忘れないボトムアップ

就任のごあいさつ

奈良女子大学 学長
久米 健次
KENJI KUME

このたび、丹羽雅子前学長の後を受けて、はからずも学長の重責にあたることとなりました。大学を取り巻く環境は厳しく、変革の時期でもありますので、皆様方のご協力、ご支援をいただきながら、一生懸命努力したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

さて、国立大学は来春の平成十六年四月から法人化が見込まれています。これまで国立大学は国の行政組織の中にありましたが、法人化されますと国が国立大学法人を設置し、その法人が各国立大学を設置することになります。この国立大学の法人化では、大学はそれぞれが目標・計画を示し、それに従って教育研究を進めて行くことになります。大学の運営組織も、役員会、教育研究評議会、経営協議会による運営に移行し、外部委員の参加など大学が社会への情報発信あるいは説明責任を果たして行く必要性が一段と強まります。もちろん、各部局とその教授会の重要性は言うまでもありません。トップダウンがトップ独善にならないよう自戒していますし、「現場を忘れないトップダウン、全体を忘れないボトムアップ」は一致点を見出せるものと信じています。今後は広報、産学官連携、国際交流、社会貢献など実務的な実施体制の強化が重要であり、全体の大枠としての方向性が確認された後は、教員と事務職員が協力して具体的な企画・立案・実施体制を強化したいと思います。小規模大学であることを利点とするように機動的に動いていきたいものです。

近々に学内的に検討すべき大きな事項としては、人事制度、予算配分、評価システム、学内の意思決定手順あるいは委員会のあり方などです。平成十二年に本学は四項目からなる理念を策定しました。この理念に基づき、さらに具体的な事項についてどのようにするかの論議が必要です。例えば、本学としてどのような分野を重点的に充実させるのか、学内の人事制度をどのように設計していくのか、予算の基盤的部分と競争的部分をどのように考えどのような予算算定基準を作るのか、などの諸点についての大筋の方向性を定めることが必要です。人や予算を注ぎ込めばある程度それに比例した成果が得られる場合もあるでしょうし、基盤的な経費を投入して長期的な観点から考えなければならない場合もあるでしょう。これらを勘案して、全体のパフォーマンスを向上させる観点で制度を考える必要があります。さらに今後は「評価」とりわけ「事後評価」が様々なレベルで重視されます。これと関連して、学内での評価システムの検討も必要です。このような「評価」については他機関での多くの試みもありますし、様々な観点での論議も行なわれています。本学の特性に合わせたものを作り上げていく努力が必要です。いずれにしても評価や重点施策は教育研究の活性化が目標であり、それらの施策自体が目標ではないので、この点を見失わないようにということが肝要と考えます。

さて、学部・大学院の新入生の皆さん方、あるいは在校生の皆さんは新たな学年での生活に慣れてこられたかと思います。大学生活の中で、是非とも自分が興味ある事を見つけてその事項に関して勉学を深めてください。各人の関心ある分野について、基礎知識を獲得し積極的に実践して下さい。それぞれの皆さんの夢を実現するには地道な忍耐強い多くの努力が必要です。大学では、是非とも将来の皆さんが発展して行く基盤となる素地を養っていただきたいと念願しています。

大学は戦後の大学改革以来の改革期に直面しています。これを受け身的にこなすだけではなく、より能動的に生かして行く契機にしたいものだと念願しています。関係者皆様方の建設的なご議論とご協力を切に願うものです。

（平成十五年四月一日付就任）

島社会での情報環境激変と学問

長嶋 俊介
大学院人間文化研究科 教授
社会生活環境学専攻・共生社会生活学講座

SHUNSUKE NAGASHIMA

日本の離島や、世界の島々で情報環境の激変期はどの様に発生し、それをどのように受け止めてきたのか?島国日本、そのシルクロード末端・始発点、奈良にあって、しばし海に想いを巡らせ、学びと実践のヒントにして頂きたい。かく言う私は島育ち、大学入試前から島研究をLife Work, Life Themeとしている。

島に生き物が渡るのは3W=Wind Wave and WingによるとDarwin Institute,Galapagos で聞いた。現地で聞くと納得である。Eはsea(level)downとfloatで島への移動を始めた。当時の通信mediaはdram,fire rocket, sun mirror or float-er(ヒ・モ)等である。島に人が住み始めた頃、一般的には自然経済的環境の中にあったとしよう。そこでの情報は地域に根ざした生活情報そのもので、長い年月の熟成が為されて行く。末端地ほど純粋な古語(国内では沖縄方言にそれ)が残される。言語年代学的に移住の時期・起源を推定することも一時盛んに為された。太平洋諸島民の歴史はその後、形質人類学・考古学発掘・放射性同位元素測定等により、詳細が見えてきた。 貝の海図と星・波、そして高度な航海技術を駆使してきた民は、モンゴロイド=Asianであり、別世界的水半球を自在に往来していた。海洋は地球の七割を占める。陸には国境線があっても、海のそれはかなり曖昧である。そこには海の論理がある。その時代船でもたらされる情報は、やはり長い年月の熟成が為されて行く。隠れキリスタンのオラショは、継承者に意味不明であっても、音階分析で、古グレゴリア聖歌そのものだったりする。今は無人島(十年来の友人=元大企業部長=Instructor for Boy-scout→Ecological Farmer→公募で選ばれ、島の自然学校長として唯一行き来しているがそ)の野崎島のキリスタンが、追手の追撃逃れ先として、朝鮮半島の東、欝陵島を念頭においていたらしい。恐るべき航海術と行動半径である。海を介する情報伝達はそのような広がり・繋がりを生み出す。そして物・技術・文化と共に伝わり残る。

情報変革の第Ⅰ期は、貿易時代。交通手段が海路優先の時代、沿岸部の島はその中継点であったり、内陸部への進出拠点だったりした。当然最先端情報と技術・物資・人が行き来した。海路で島同士も結ばれ、芸能文化・言語・道具類等々に今も共通痕跡が見られる。中央直結型の文物・文化も稀ではない。

第Ⅱ期は、陸路化の時代。鉄道・自動車交通の普及で、交通路上、島が末端地域になり「離島化」時代を迎える。情報上も「後進地性」を余儀なくされる。島同士の連絡・情報・物流も、限定的となる。

第Ⅲ期は、振興(被支援)時代。一九五三年宮本常一他の学者手弁当の活躍で、日本最初の議員立法により「離島振興法」が制定される。光と水の革命で、生活の基本基盤整備がなされる。電気は情報過疎地・遅延域を、改善的に支援していく。Radioの政治番組に耳傾ける姿は、Caribbean島嶼国でも隠岐島前でも真剣そのものであった。その気の人には克服できる差となる。地域振興研修機会に離島相互で意見交換しても、高水準の人材が各地に居り、ずれない時代・社会認識での議論確保も可能であった。

第Ⅳ期は、人口・人材流出時代。人そのものの移動が情報環境を内部から変えていく時代。小さな島では高校や中学が統合され無くなり、「地域の先生」も抜け、あるいは通いになる。大きな島でも、出稼ぎのみならず、若手・基幹労働力が持続的就労機会・好条件職場を得られず流出。郷土史家・地元学的人材確保も困難化していく、外PULL内Push時代。

第Ⅴ期は、島価値見直しの時代。島の外・内から島の自然・文物・暮らしぶりの価値的見直しが始まる。まず特定の人・集団が、文芸実践・憩い・自然体験・人情享受・Lifestyle追求的な別空間、憧れや逃避の対象として、再評価が始まる。その波はIsland Therapy(島癒し)的外評価、I Turn者受け入れ、U Turn帰島民の自己表現多角化へと進展し、付加価値的展開と開放化により共創的生活転換が始動期を迎える。

第Ⅵ期は、本格的高度情報化時代。狭義情報装置は、高速度処理・大容量送信で、地球規模的に辺境域をも変えてしまう。Green Land先住民集落でもInter-net社会を迎えていた。郷里佐渡では、一〇〇人以上のMailing Listが二つ毎日活発な議論を展開している。二〇〇二年離島振興法改正で後進性規定が削除され、国家・国民への貢献、地域振興計画の自己決定、条件不利地域性改善等への支援が柱になり、ソフト事業も加わる。

二〇〇二年佐渡ではNPOを立ち上げ、①子ども情報教育支援②海洋自然学校③NPO地域センター活動を始めた。佐渡の田舎から日本文化を創造的に表現してきた太

鼓集団鼓童事務局で働き、Radio Personalityを務め全国TV招待も多い篠笛の名手を夫にもつ、島外出身女性が地道に準備してきた。①では、集合概念操作や課題発見や自己表現などで工夫をさせる。小学生でも指導者になれたりPower Point 操作も自在となる。朱鷺生息地古老聞き取り等で五感・リアリティに留意する。学校授業支援もする。②は地元や天災避難中の三宅島の子どもが、海洋生物学者Jack T. MOYER と体験学習したり、指導者養成をする。③はNPO先導者として県域を繋いだり、地域通貨実験等も試みる。

初代代表理事として協力しているが、学識と経験は①～③どの仕事でも問われる。大学のInternshipや共同調査Projectも受け入れる予定である。朱鷺野生復帰Biotope作り二十ヘクタールに新潟大学・経済連が支援を開始し、これと①のLinkも予定している。二〇〇三年三月には新潟大・奈良女大各二名の合同卒論発表会を朱鷺の村新穂で実施した。佐渡での②体験・食農基盤、環境人災被害地豊島、植生再生、ブナ林調査等をOpenな場でPower Point 報告をした。成果の地元還元は本来の学問的使命で、瀬戸内離島で関学地理学教室がしてきたように卒論製本物を各島に残す事は、地元の情報資源、次なるより高次な研究への共有情報資産にもなる。File化も容易化しており地元要望も強い。

日本最南端波照間島で介護Stationを核に沖縄県立看護大学と地元助け合いVolunteerが予防介護に取り組んでいる。ここもNPO化が実現しそうである。助け合い・振興調査で協力中だが、八十歳代の強制疎開マラリア被害体験を後世に伝えたい意欲も強い。戦前の事も人格の中では現在と連続している。情報の超時間性・超空間性の原点もそこで学ばせて頂いた。

さてA Space Ship:The Earth(and Sea)地球号の未来や如何に。高度情報化でfrontierは聖域やtaboo無く、Synchronized Society:同時空間化が一気に進んだ。縮み行く衛星Shrinking Planet化の下でunity vs. diversity両立が課題となる。共生社会co-living society理念の再考が求められる。Mass-media情報価値の専横化にもmedia-literacy的対抗力が課題となる。特にcommercial baseとpolitical orientedには別次元の思考力鍛錬も大切になる。Sense of wonerで自然界(命life1)、食農food-agro教育で暮しlife2、slow life実践で人生life3を、見詰めなおす。本質的価値intrinsic value(目的vs.手段),実体的substantive(広義)経済、critical(違いの分かる)thinkingと内省reflectionに基づく行動action。これらを島の日常生活を基礎に考える時、そこには実に豊かで、幅と実感に満ちた足元が見えてくる。文明のhard-soft wareのみに目線を支配されること無くhuman,spiritual and eclogical wareも現場では重い意味を持つ。暮し・命・人生の現場から学問を発信するのも学徒の役割である。女性海洋生物学者Rachel Carsonの科学知を上回る洞察力inspectionに学んでほしい。優れた人生脈絡life-contextへの洞察力がwisdomである。島生活者の知恵には幅・深み・優しさがある。

NASDA宇宙開発事業団 parabolic antenna for following-up the satellite(2003年3月キリバスChristmas島洋上にて)

「教育を語る言葉」を語る

西村 拓生
文学部 助教授
人間行動科学科 教育文化情報学講座

TAKUO NISHIMURA

最近、教育を語る言葉の問題を考えています。きっかけは、奈良女子大学と附属学校園の連携の仕事に取り組んだことでした。私たちの大学には、教育史上、特筆される優れた伝統を持ち、それを今日まで豊かに発展させている幼稚園、小学校、中等教育学校があることはご存じの通りです。国立大学をめぐる昨今の情勢下、大学と各附属の連携を強化することが求められています。しかし、それがなかなか容易ではないのです。もちろん事情は単純ではありません。初等・中等・高等教育という段階の違いもあれば、いわゆる「過去のいきさつ」だってあります。その中で、とりわけ私が気になったのは、それぞれが教育を語る言葉でした。先生方が教育を語る「語り口」が、学校によって全く異なるのです。そのことは、単に相互の理解を阻害する、という以上の困難を意味しているように思われました。

たとえば、或る授業について教師や生徒や観察者が語る、という事態を、私たちは普通、授業という「現実」を言葉によって様々に「うつす（写す・映す）」という構図で理解しているかと思います。その時、いわば「授業そのもの」が、それを語る言葉に先立って実在していることは疑われていません。言葉はそれを、後から「うつす」ものと考えられています。しかし、この構図は疑う余地のないものでしょうか。むしろ、授業という「現実」は「語られる」ことによって初めて立ち現れてくる――あらかじめ「授業そのもの」などというものは存在しない――と言ったら、ずいぶん突飛な言い方に思われるでしょうか。

このような、私たちの「現実」は私たちの「語り」による、言葉による「構成」の所産である、という理解は、哲学や言語学の領域では決して奇矯なものではありません。そして、この視点を教育学に取り入れた新しい方法論が、近年、注目されています。「臨床教育学」と称します（厳密に言うと、それにはいくつかの流儀があるのですが、ここでは詳細は省きます）。これは、たとえばいじめや不登校といった教育問題に対し、それらが「問題」であることを前提として「解決」や「治療」を求めるのではなく、むしろそれらの出来事を「問題」たらしめているコンテキスト――そもそも教育とは、また問題とは何か、についての日常的な理解――を問い直す契機として受けとめよう、とするものです。そこで求められるのは、「問題」に直面した教師や親が、問題と見なされる出来事を異なった筋立てで「語り直す」ことです。しばしば行われるように問題を分析して対策を立てたり、処方箋を求めたりはしません。何ともまだるい、いったいどんな意味があるのだ、と思われるかもしれません。しかし、出来事が新たなコンテキストで「語り直される」時、それは言葉の相だけにとどまらず、教育の「現実」そのものを変容させます。何となれば、私たちの「現実」は私たちの「語り」によって初めて「構成」されているものなのですから。

この「臨床教育学」の発想を、教育の日常へと展開できないだろうか、というのが私の目論見です。奈良女子大学の附属校園の教育は、小学校の「しごと・けいこ・なかよし」をはじめとする豊かで巧みな語彙とレトリックによって語られてきました。それは附属の実践の単なる「うつし」ではなく、そのような「語り」自体が実践の豊かさを可能にしていたのだと考えられます。しかし、その成功の故に、いったん確立された「語り口」は、それ以外の「現実」が立ち現れる可能性を封じ込めてもしまいます。「主体性」「学び」「生きる力」――いずれも然りです。それに対して、同じ大学の附属の間でさえ言葉が通じないというのは、確かに困難な状況であると同時に、チャンスでもあります。何故ならそれは、「臨床教育学」における教育「問題」と同様、私たちに「語り直し」を促すからです。お互いの教育の「語り直し」によって新たな教育「現実」が生成する、その可能性を附属の先生方と一緒に確かめてみたいのです。――翻って、大学の教師である私たちは、自らの教育を語る、いかなる言葉を持ち得ているだろうか、と自省してみた時、寒々とした思いにとらわれるのは果たして私だけでしょうか？

化学アカデミックガイダンス『分子を見る！』に参画して

岩井　薫
理学部　助教授
化学科　機能化学講座

KAORU IWAI

大学の教官もさまざまなところで講義する機会が増えてきた。私の場合も、以前は学部生・院生のみを相手に講義するだけであったが、そのうち公開講座で一般社会人の方々を対象に講義したり、高校への出前授業を行ったり、また、高校の先生方の研修会に講師として招かれたりもした。昨今は、大学にとって地域貢献も重要との認識から、各学部においてもさまざまな事業が企画実行されるようになってきた。

今年の春休みに、高校へ進学する年頃のみなさんを対象とした地域貢献事業に参画する機会を与えられたので、本稿では、その時の一端を紹介することにする。

ことの発端は、奈良市にある東大寺学園中高等学校化学担当のA先生からの「奈良女子大学化学科には見学会等のプログラムがある旨の情報を得たが、中学を卒業して高校に進学する学生を対象として、春休みに見学会等を開催してもらえないか？」との打診に始まる。ふつうの公開講座や出前授業の場合には、受講者についての情報が少なく、講義・授業の内容も担当者任せであったり、打合せがあっても極々大まかであることが多い。それでももちろん講義する側の立場の人間としては、その事業の目的や参加者の人数や年齢等を考え、それなりに内容を検討し、できる限りの準備をして会場に向かうのだが…、なかなか思うように参加者に満足感を与えることは難しいし、また、達成感を得られないのも事実である。

本事業では、問合わせから実施まで比較的時間があり、また、事業が春休み期間中ということもあって、事業担当教官数名とA先生との間で数度に渡る詳細な打合せを行った。その結果、大学の研究室で行われている化学研究のモデルとして「素晴らしい性質や新しい機能をもつ分子を設計し、そのような分子を化学的に合成し、得られた分子の構造を最先端の測定機器を使って調べ、その分子の性質や機能を評価する」ことを念頭に、きちんとした分子の概念すら持たない中学を卒業したばかりの生徒たちに、大胆にも、化学研究の重要性や研究の過程で出会う様々な苦労や楽しさの一端を伝えることとなり、本事業化学アカデミックガイダンス『分子を見る！』を実施することとしたのである。

この計画を実行し、その目標を一日の本事業である程度までなら達成することは決して容易なことではなく、事業当日までにA先生にもいろいろな下準備をお願いすることとした。まず、生徒さんたちに本事業の内容を知らせて頂き、自然科学に興味を持つ参加希望者を募ってもらい、ある程度の事前学習の指導もお願いした。そしていよいよ当日を向かえたのである。

その日の内容は、午後からの実験・実習への理解を深めるため午前中に五〇分の講義を二コマ：①「分子」ってなあに？（岩井担当）、②いろいろな「光」で分子をみる（棚瀬担当）、昼食のあと、午後からはグループに分かれて可視紫外吸収分光分析・X線結晶構造解析・核磁気共鳴吸収分析・質量分析の四種の分析機器による実験・実習に時間をかけて一コマ：③「先端機器」を用いて「分子」を見る（棚瀬および大学院生担当）、④最後に質疑応答の時間というメニューであった。

ことの詳細は省略するが、後日送られてきた生徒たちの感想には、【講義に関しては】内容は難しかったが説明はわかりやすかった、事前の学習や講義のおかげで難しいながらもある程度理解できたなど多少の戸惑いは感じられるものの午後の実験・実習の理解の助けになったものと受け取れるものが多く、【実験に関しては】すごい機械がたくさんあっておもしろかった、実験もよくわかったなどの意見が多く、また、【全体的な感想としては】とにかく楽しかった、大学の研究の雰囲気がわかった、機会があれば次回も是非参加したい、有意義な一日だった、化学の知識だけでなく大学生活などいろいろ教えてもらえて参考になった、中高校での化学実験とはイメージの異なるものだった、など私たち本事業に参画した者にとって非常に喜ばしいものが多く見受けられた。同様に、本事業に参加協力してくれたスタッフの印象もすこぶるよいものであった。

本事業を通じて、私たちの中高生時代には想像だにしなかったような経験を将来性豊かな子供たちが体験するお手伝いができ、また、私たち参画者の期待を上回る成果？をあげられ、さらには私たちも普通の講義では感じられない新鮮さを生徒たちから与えてもらったことをみなさんにお伝えし本稿を閉じようと思う。本事業に参加してくれた生徒のみなさん、ありがとう！

なお、本化学アカデミックガイダンス『分子を見る！』は、奈良女子大学理学部 地域貢献特別支援事業「奈良を理科・数学（算数）大好き日本一に」の一環として、平成十五年三月二十七日十時～十七時に化学科教官並びに大学院学生有志を実行部隊として行われたものです。

ヘアカラーしてますか？

前川 昌子
生活環境学部 教授
生活環境学科 アパレル科学講座

MASAKO MAEKAWA

時代とともに流行は巡り、美意識も変化する。かつて十代の若き乙女の服装といえば、制服は別として、日常着はどちらかといえば明るい色彩の衣服が好まれていたように思う。何年か前、作業服のようなくすんだ色彩の服が流行った。また近年、町で見かける女性たちは黒と白、あるいは黒とグレーのようにモノトーンで決めている場合が多い。入学式やリクルートに黒やグレーのスーツがいつの間にか定着している。

一方で、茶髪という言葉が聞かれるようになって久しい。ヘアカラー事情は様変わりした。わが国では、烏の濡れ羽色（烏羽色）が女性の髪の美しさの定番であったが、近年では白髪が目だってきた女性の白髪隠しのみでなく、老若男女を問わず毛髪の色を変えておしゃれを楽しむようになった。ファッション感覚で洋服やアクセサリーを選ぶように、手軽にカラーリングを楽しんでいる。店頭にはおびただしい数のヘアカラー製品が並んでいる。美容院に行かなくても、手軽に髪色を変えることができる。しかし、それらは種類により毛髪への着色のメカニズムが異なり、効果の持続性やダメージも異なる。

《ヘアカラー製品の種類》

カラーリングを目的とした製品には次のようなものがある。

① 一時染毛料（カラースプレー、カラーフォーム）
色素を毛髪に物理的に付着させる。

② 半永久染毛料（ヘアマニキュア、カラーリンス）
色素を毛髪にイオン結合で吸着させる。

③ 永久染毛剤（ヘアカラー）
毛髪の脱色と染色を同時に行う。（後述）

④ 脱色剤（ヘアブリーチ）
毛髪を酸化剤で処理してメラニン色素を分解し、髪色を明るくする。

これらの中で、③永久染毛剤と④脱色剤を用いた処理により、カラーリング効果は長続きするが、反面、毛髪や頭皮への作用も強く、使用には注意を払わなければならない。

《ヘアカラーのしくみ》

白髪と違って、黒褐色の毛髪を明るい色にしたり、鮮やかな色に染色するには、毛髪中のメラニン色素を酸化剤を用いて分解しなければならない。酸化剤として多くは過酸化水素が用いられる。脱色には、過酸化水素が解離してできるペルヒドロキシイオンが有効である。しかし、この解離はアルカリを加えないと小さく、脱色効果は得にくい。

市販のヘアカラー剤の多くは、パラフェニレンジアミンなどの比較的低分子量の酸化染料とアンモニア（アルカリ剤）と過酸化水素（酸化剤）の三成分から構成されている。これで処理すると毛髪はアルカリ剤の働きで膨潤し、その中を酸化染料が浸透する。そして、酸化剤により重合して発色した染料は、不溶性色素となって毛髪中に定着する。このとき酸化剤はメラニンの分解も同時に行う。このようにして毛髪は明るい色になり着色される。

《ヘアカラーして大丈夫？》

ヘアカラーの売上は不況の中でも伸びており、シャンプーなどに並ぶ市場規模に達している。しかし、髪色を変えて気分も軽やかになった反面、毛髪や頭皮の損傷を訴える人も多い。電子顕微鏡で観察すると、ヘアカラーして傷んだ毛髪は、キューティクルが剥がれ、内部もすかすかになっており、伸び易く切れ易くなる傾向がある。アルカリが頭皮・毛髪を構成するタンパク質に良くないことは、周知のとおりであるが、前述したペルヒドロキシイオンは不安定な物質で自己分解し易く、発生した酸素が毛髪や頭皮を傷める。また、フェニレンジアミンは発ガン性に注意しなければならない化合物である。酸化染料は安価であり、かつて木綿や麻の染色に広く用いられたが、有害性、色相の不安定さ、繊維のぜい化などの理由により使われなくなり、今では反応染料がセルロース用染料の主流となっている。今、次世代ヘアカラーが模索されている。

寄稿 私のチャレンジ

「私自身」として生きるために

久世 芙美 文学部 1回生

HASUMI KUZE

奈良女子大学に合格した！合格発表を見て、あまりの驚きと嬉しさで飛び上がってしまいました。この学校に入れたらどんなに良いか。そう思いながら、試験に臨んだあの緊張感は今でも忘れられません。私は生まれつき聴覚障害を持っているため、中学まで聾学校に通っていました。当時の私にとって、健聴者は「話しにくい」というイメージが強かったため、健聴者の知り合いは数えるほどしかいませんでした。けれど、中学に上がった頃、私の中にこのまま聾者だけの世界に留まることは出来ないと思いが生まれました。そういう思いが、私を普通高校の進学へと突き動かしたのです。私にとって、未知の世界への挑戦（＝普通校の進学）は大きな覚悟と勇気を決しました。正直、快調な一歩とは言えませんでした。けれど、その大きな第一歩は、今までの価値観に新しい視点が生まれ、そして、内面でも大きな変化を与えてくれました。そして、奈良女子大学の受験もまた、私にとって、進む道の大きな分かれ目だったのです。

念願の奈良女子大学に入学した今、私は、とても充実した大学生活を送っています。大学の講義では、口頭での説明が多いと聞いていたので、講義の内容が理解できるのかどうか不安でした。高校の授業では、先生方が板書、話のスピードなど、様々な面で配慮をしてくださっていたので、大体の内容はわかりました。けれど、それはちょくちょく読み取れる言葉の断片を拾い集めて、話の内容を想定したに過ぎないので、いつも「これで本当に正しいんだろうか、間違いなのではないか。」と確信出来ませんでした。けれど、奈良女子大学に入って、その不安は払拭されました。奈良女子大学の先生方が、聴覚障害者への配慮やノートテイクなどについて真剣に取り組んで下さっていたからです。ちなみに、この「ノートテイク」とは、教授の話している内容をリアルタイムで文字に書き記し、聴覚障害者に伝えるという方法です。初めてノートテイクをつけていただいた授業は、内容があやふやになることもなく、不安になることもありませんでした。「授業ってこんなに面白いものだったんだ」それは意外な発見でした。先生の話の流れも眼で確認できるから、無理なくついていくことが出来るし、内容の細かい部分も知ることが出来る。安心して講義が受けられるということは、私にとってすごく嬉しいことでした。

そして、大学で様々な人々と関わり合い、私はあることに気づきました。私が本当に怖がっていたもの、それは障害を持つ自分に対してだということに。今までの私は必要以上に「障害なんか関係ない。私はやれる。」という脅迫観念にも似た思いがありました。けれど、高校、大学という社会において、それは変化しました。「障害を持っているから、今の私がいる。障害があるから、頑張れる。」新しい世界で友達や先生方と出会えた喜びと、感謝に対して、私は障害者として生きるのではなく、健常者として生きるのではなく、「私自身」として生きたい、と切実に思いました。そして、大学という学びの場で、私は、「哲学」を通して、「私自身」として生きるとはどういうことか、ということについて答えを見出したいと思っています。そしてもう一つ、「人間の存在意義」――「何故生きるのか」という人類最大の問いかけでもある人生の目的を深く学びたいと考えています。人生の目的を追い求めることで、さらに「世界」を見る視野を広げたいのです。人間の“外”だけではなく、“内”をも含めて、「世界」への眼差しを養いたいと思っています。

Challenge

寄稿 私のチャレンジ

インターンシップを通じて得たもの

竹中 弘枝
理学部 化学科 四回生

HIROE TAKENAKA

私は、昨年の八月十九日から三十日までの十日間、田村薬品工業におきましてインターンシップに参加いたしました。「働く」というのはどういうことであるか、自分のイメージや先入観を捨て、身を持って感じたいという思いから、またそのころの私は就職と進学とで悩んでいたので自分の中での職業についてを考える良い機会になると思いインターンシップへの参加を決意しました。

十日間の実習において本当に多くのことを感じましたが、業務内容を通じて振り返ってみたいと思います。一～二日目は総務部の一元で会社組織、一般的なマナーについて学びました。続いて、三～五日目は研究開発部での実習となりました。ここでは新しいドリンクの試作や、薬品の中に本当にその成分が入っているかなどを調べるといったことをしました。私はフローに従って実験を行ったのでうまく成分を確認することができましたが、担当の方からこのフローを作るまでの試行錯誤が大変だということを伺って、一つの製品を完成させ試験を行っていくのには多大な時間や労力がかかっているということを感じました。また、それらをこなしていくのには経験を積むことと共に、自分自身での勉強や発想を広げる視野が大切であると感じました。

六～九日目は品質管理部で実習をしました。仕事の内容は大まかに資材試験、製品試験に分かれていて、すべてがここのチェックを通らないと出荷されないので身の引き締まる思いで実習をしました。ここでは決められた時間に沿うように多くのことを並行して行わなければならず、一日の計画を明確に持って仕事をしていかなければならないということを改めて思いました。品質管理では、他の部署との関係が緊密で前回の結果が素早く次回の生産に反映されていたのでそれに驚くと同時に素早く、正確に試験結果を出すということが大切だと感じました。

実習を終えて全体として感じたことが二つあります。一つ目は会社生活というものに対する自分のスタイルについてももっと考える必要があるということです。今までは仕事の内容であるとか、自分が何をしたいか、ということばかりを考えていましたが自分が社会人として過ごす場、としての職業を、職場を選ぶことが大切であると思いました。二つ目はやってみなければ何も始まらないという事です。今回インターンシップに参加して、実際に体を動かすこと、自分で考えることの大切さを改めて実感しました。事前研修においてマナーのお話を伺った時「形から入ることよってそこに心が近づいていく」という言葉がありました。やってみたいと思った気持ちを大事にしてまずは動き出すこと、そして続けていくこと。そんなあたりまえのことですがそれを実行することの難しさに直に触れられたと思います。これからもそのことを普段の生活の中で常に心に留めて様々なことに挑戦していきたいと思います。

初めて学会に参加して

伊藤 海織
大学院人間文化研究科
生活環境学専攻 一回生

MIORI ITO

私は単調な日々を過ごしていて、これと言って何かにチャレンジしているという意識はないのですが、初めて参加した学会のことを書かせて頂こうと思います。

まず学会に参加することになったいきさつですが、卒論も大詰めの二月のある日、指導教官の今岡先生から学会で発表しないかと誘って頂いたのです。進学することが決まっていて、大学院生になったら学会にも行ってみたいとは思っていましたが、まさか初めから発表するとは思ってもみなかったので、すごく驚いてしまいました。その学会は日本繊維製品消費科学会の二〇〇三年年次大会で、ちょうど今岡先生が実行委員長で、会場が奈良女ということでした。人前で話すとすごく緊張してしまう私にとっては、会場が自分の大学というのは、安心できることでした。

発表内容は卒論と同じで良く、少しでも新しいことが分かれば付け足すということだったのですが、あっという間に発表の日が近づいてきてしまい、研究内容は卒論のままで、発表内容を少し詳しくするということに留まりました。私は一つのことを理解することができるようになるまでにとても時間がかかってしまいます。しかし読むべき文献も考えるべき問題もするべき作業もたくさんあります。自分なりには一生懸命やっているのですが、もっともっと勉強して少しでも研究のペースを速めなければならないし、それ以前に分からない時はどうすればよいのかというような勉強方法を身につけなければならないと、大学院に進学してから強く感じます。具体的に言うと、分からない時にどの分野の文献を調べたらよいのかわからないし、文献を読んでもそこに何が書かれているのかわからないのです。これは基本的な知識がきちんと身についていないことに起因しています。四回生の時のように一年間である程度まとまった結果を出さなければならないということはないですから、今年は基礎を固めるほうに重点を置きたいと思います。

学会の前々日に会場準備のお手伝いとして、三つの講義室を掃除しました。私は掃除機をかけていたのですが、講義室三つとなるとかなりしんどく、いつも掃除して頂いている職員の方に感謝の念を抱くとともに、講義室を使う私たち学生もきれいに使う心がけが必要だと思いました。

学会当日は全国からたくさんの先生方がいらっしゃって、いろいろな発表を聞くことができました。もちろん自分とは違う研究内容ですから、わずか十二分間の発表を聞いただけではなかなかわかりません。しかし、発表の上手な先生からその方法を学ぶことはできますし、私の研究内容と似ている発表については、今後の私の研究において違う見方を提示して頂いたように思います。

私の発表については、とにかく声の出し方に気を付けました。これはそれまでの発表を聞いて大事だと感じたことでした。私の研究はとても未熟ですが、聞いて下さっている先生方に少しでも伝われば、何かアドバイスをもらえるかもしれないからです。発表原稿を予め用意していたので、つかえないようにゆっくりと読み、普段より声を少し大きくはっきりと出しました。その甲斐もあったのでしょうか、お二人の先生がコメントを下さいました。ただ、お二人とも「詳しいことは分かりませんが」とおっしゃっていたので、私の説明の仕方がよくなかったのだと反省しました。上に書いたことと反するようですが、私にも細かい部分は分からないけれども大筋は分かる発表があったのです。私は服の型紙のアームホール曲線について研究しているのですが、発表内容が数学に寄っていて、私自身まだまだ数学については勉強不足ですから、うまく説明できなかったのだと思います。発表後、コメントを下さった先生にゆっくり質問することはできなかったのですが、その際に「よかったらお手紙を下さいね。」とおっしゃって下さってとても嬉しかったです。学会に出るのも始めてですし、有名な先生方がたくさんいらっしゃって、私のような学生は相手にされないのだろうかと萎縮していたのですが、私とお話して頂いた先生方は皆さんとても優しくしてくださって、また次の学会にも参加したい、と私のやる気を起こして下さいました。

中国内モンゴル自治区の黒河下流域調査

相馬 秀廣
文学部 教授
国際社会文化学科 地域環境学講座

HIDEHIRO SOHMA

「あれー、去年無かったのに、河（エチナ河）に水が在るじゃないか!!しかも、こんなにたくさん!!」二〇〇二年七月末、地球環境学総合研究所のオアシスプロジェクトで、黒河最下流のオアシス、エチナ旗に入ったある日本側研究者の第一声。

このプロジェクトは、中国のオアシス地域において、主に水資源の変動に着目して、過去二〇〇〇年間にわたる人間と自然系との相互作用の歴史を復元することを目的としています。私は、沙漠である最下流域を対象に、「漢代から西夏・元代にかけての遺跡分布とそれらの立地条件など」、および、「現在干上がっている湖群周辺の地形や湖底の堆積物中に残された各種の微化石などから古環境変化」を明らかにする二つのグループに属しています。ここでは前者について述べます。

黒河下流域には、西夏・元代の有名な黒城遺跡があります（一九八〇年代のNHKシルクロードシリーズにも登場）。遺跡関係の事前調査では、主に、城郭や仏教施設などの遺跡およびそれらを支えたであろう灌漑水路跡・耕地跡の抽出を目的として、一九六〇年代の東西冷戦期に撮影され一九九五年に公開された、米国偵察衛星写真Corona（ポジフィルム）とそれをパソコンなどでデジタル化した画像を判読しました。その結果、付近には現在は水がまったく無く、黒城遺跡の南側に灌漑水路らしき土地パターンが隣接すること、本流のエチナ河からみると、それが灌漑水路であれば、二回も分流した後の水路であることなどが解りました。

現地では、灌漑水路跡と予想した部分に、幅十メートル（一部では幅二～三メートル）程度で周囲よりも三十～四十センチメートルほど低い、直線やほぼ直角に屈曲した部分を含む長く延びた低所がありました。その両側には、ほぼ平坦な区画、土器や瓦の破片が散在したところ、ひき臼の断片が集まったところなどがありました。これらの点から、長く延びた低所は灌漑水路跡で、土器などが散在していたところはかつて人間生活の舞台（耕地跡および居住部分など）となっていたことなどが判明しました。従来、黒城遺跡の存在は確認されていましたが、周辺の灌漑水路跡や耕地跡などを具体的に示した報告はありませんでした。四十度をはるかに超える炎天下、泥と礫でできた沙漠で一緒に行動をしていた日本側と中国側の研究者二名と共に喜びました。

さらに、簡単な測量で、かつての灌漑水路底と黒城遺跡がある平坦面までの高度差が約八mで、途中に二段狭い平らな部分があることなどを確認した後、黒城から西へ百メートルほど離れたイスラム時代の建物で、ミネラルウォータ五〇〇ml、ハミウリ、朝街で購入した肉まん（パオズ）の昼食を摂りました。建物の中は、まさに天国。

その後、エチナ河から大きく離れた、黒城北方に広がる西夏・元代の仏塔や寺院跡でも、黒城南側とほぼ同様に、灌漑水路跡や耕地跡などが隣接していました。現地調査の結果を踏まえて、再度衛星写真Coronaを判読すると、エチナ河から黒城がある北東方向へ、灌漑水路や耕地跡などかなり広い範囲に分布し、その下流側延長は黒城をはるかに超えて、砂沙漠に覆われた部分にまで広がっていたことが判明しました。西夏・元代、この付近は一大農耕地域であったことが推察されます。

これに対して、現在のエチナ河本流沿いには、漢代の遺跡が連続的に分布しているものの、灌漑水路跡や耕地跡などは判読できず、現地でも発見できませんでした。食糧は他所から運搬してきたことになり、文書にも調和する記載があるそうです。

かつて農耕地域であったエチナ河下流域ですが、現在はモンゴル族が農業と遊牧を行っています。しかし、農業に不可欠な河川水は、極めて不安定な状況です。この背景には、氷河を頂く祁連山脈に発した黒河が山麓に形成した数多くのオアシスとの、水を通したせめぎ合いがあります。現在、政治的に優位な漢族が生活する山麓オアシスは、多量の農業用水をまず確保します。そのため、農業用水の需要が大きい夏場には、下流のエチナ地域に流下する河川水はほとんどないのが実情です。

冒頭の発言は、この背景を端的に表しています。

英国滞在記（研究編）

2000.10.1-2001.7.31

上江洲 達也
大学院人間文化研究科 教授
複合現象科学専攻・複合自然構造講座

TATSUYA UEZU

本学就職以来、十七年間待ち続けていた在外研究員としての英国出張がとうとう実現したのは、二〇〇〇年の十月一日であった。

イギリスでの十ヶ月間の予定は、研究面では、まず、最初の八ヶ月はロンドン大学キングズカレッジの数学科でA.C.C.Coolen(クーレン)教授と共同研究をし、その後、マンチェスター工科大学(UMIST)に移動して、応用数学科のD.Broomhead教授と共同研究をすることであった。また、出発時点で、学部、修士、博士の学生合わせて七人を担当していたため、教育面では、e-mailやファックスを用いて、学位論文や修士論文、卒業論文の指導を行う予定であった。もちろん、十ヶ月に及ぶ海外生活は始めてなので、なるべくいろいろな体験をしたいと考えていた。英国の文化にじかに接することや日常生活自体も大きな楽しみであった。

このような計画や期待を抱きつつ、関空を出発しアムステルダム経由でヒースロー空港についたのは夕方であった。博士課程の学生の二コスが迎えてくれた。案内されたのは、大英博物館のすぐ近くにあるジョージア調の建物の地下一階のアパートであった。セントラルロンドンに位置しているため家賃は決して安くはなかったが、大学のキャンパスの中にあることもあり、静かな環境で研究や瞑想にひたるには相応しいところであった。

そこには、二ヶ月住み、十一月からは、大学まで地下鉄、バスを使って一時間弱の所にあるロンドンの西のWest Actonに移った。

ロンドン到着の翌日、キングズカレッジに初めて出かけた。キングズカレッジは、ピカデリーサーカスまで徒歩十五分程度の近さであり、ロンドンのど真ん中に位置している。私の使う研究室は、ポスドク一人、博士課程の学生一人との三人の部屋であり、自由に使えるワークステーションも二台あった。他の二人には、ロンドン滞在中、コンピュータや日常のことなどいろいろお世話になった。

クーレン氏はオランダ人であるが、彼のグループは、他二人のスタッフと学生が五人で、国籍はオランダ、イギリス、ドイツ、イタリア、ギリシャ、インドと国際色豊かであった。このグループは数学科内にあるものの、Neural Networks and Disordered Systemsをテーマとしており、統計物理の専門家集団ということができる。

研究は十一月からスタートした。テーマは、時間スケールが分離したニューラルネットワーク系の相転移現象を一般的な状況下で調べるというものであった。時間スケールが二つの場合には先行研究があるが、それを任意の個数の時間スケールがある場合に拡張し、更にある極限での漸近的挙動を調べるという目標をおいた。研究のめどがたつまでは、日曜以外はほとんど毎日大学に行き計算を行った。紆余曲折が多々あったが、結果には満足している。クーレン氏との共著で論文として出版されている。ロンドングループとは、その後も共同研究が続いている。

ロンドンには結局六月始めまでいた。その後七月末までのマンチェスターでの生活も有意義であった。ここは午後十時過ぎまで明るく湿度も低いため極めて快適であった。研究室まで歩いて二分のところにある寮に滞在した。研究室は、ロシアからの研究者としばらく同室であった。ブルームヘッド氏は大学院時代からの知り合いで、私は以前もここに二ヶ月滞在したことがあった。今回は彼らの進めていた研究と関連した力学系のあるモデルについて一つの結果を得ることができた。

ところで、日本に残した学生の皆さんとは、普段はe-mailでやり取りし、論文執筆の頃はファックスを利用して指導を行った。全員、無事に論文を完成し卒業したが、学生のみなさんの努力の賜物だと感謝している。

研究以外では、Newton研究所に招待されて滞在していた北大数学の泉屋氏を訪ねてCambridgeに出かけたり、観劇をしたり、病気になったりといろいろあったが、別の機会に書こうと思う。

二〇〇一年七月三十一日に再び関空におり立ったとき、自分がかなり疲れていることを感じた。実際、帰りの機中で(再び)発熱してしまった。やはり、緊張して無理をしていたのだろう。ほんの二年前のことであるが、なんだか遠い昔のような気がしてならない。

最後に。出発前、研究室のメンバーが送別会をしてくれた。特に、友人の重本氏には出発前も留学中も大変お世話になった。また、英国での滞在が可能になったのは、ロンドン大学や奈良女子大学の関係者の皆様のご尽力のおかげです。これらの皆様に感謝の意を表したいと思います。

ユネスコ信託基金による ガンダーラ遺跡保存プロジェクト

増井 正哉
生活環境学部 助教授
人間環境学科 住環境学講座

MASAYA MASUI

「コラムをお引き受けして改めて数えてみた。一九八三年、京都大学中央アジア学術調査隊の隊員としてはじめてパキスタンを訪問して以来、途中二年間の中断はあったが、この五月の出張は、三十一回目の訪パだった。とくに、一九九五年からユネスコ信託基金によるガンダーラ遺跡保存プロジェクトの責任者ということになってからは、年三〜四回は訪パしている。昨年も四月、十月、十一月の三回、今年になって二回、パキスタンに出張させていただいた。

だから、私にとってパキスタン行きは「訪問」というより「帰省」にちかい。現地では主にガンダーラ遺跡の保存修復の現場監理を行っている。もちろん仕事に行っている訳で、昼は遺跡で作業、夜はデスクワークになる。その他、住民の引き起こすトラブルの処理、関係当局との折衝の他、工程（これがうまく行かない）・金・人の管理など、研究者の立場から見ると、雑務ばかりである。五月の訪パでも、突然閉鎖になった銀行からプロジェクトのお金を取り戻すことも、重要な仕事だった。じっさい日本にいるよりずっとタフな毎日になる。それでも、親しい人びとと懐かしい景色に癒される旅は、訪問というよりは帰省である。遺跡にほど近い集落の民家を借り上げて宿舎兼現場事務所にしていて勝手にNarajo Houseと名付けている。そこには、二十年来、細々と世話をしてくれているスタッフがいて、縄張りベッドに横になると、わが家のベッドより、よく休まる。

（ラニガト遺跡）

ガンダーラはパキスタン北西辺境一帯の古名である。インド世界と中央アジアを結ぶ地域で、二〜四世紀に、独特の仏教文化を生み出したことで知られ、多くの仏教遺跡がある。ただ、盗掘や近年の急速な地域開発によって、消滅の危機にさらされている。ユネスコ信託基金のプロジェクトは、こうした遺跡の包括的な保存に取り組もうとするものである。

プロジェクトをお引き受けして以来、遺跡のモデル台帳づくり、調査／修復用機材のインストールとオンジョッブトレーニング、国際ワークショップの開催など、いろいろなことをやってきたが、仕事の中心になっているのは、ラニガトという遺跡のモデル保存修復である。この遺跡は、京都大学の調査隊が一九八三年から一九九二年にかけて発掘調査を行ってきた遺跡で、ガンダーラでも最大規模の仏教遺跡である。モデル事業の対象遺跡を決める会議で、「日本隊の発掘した遺跡の保存は日本人が責任を持つべきだ」という、パキスタン側の、すごく当たり前の主張が通って、この遺跡が対象になったのだが、何のことはない、調査隊の下っ端だった私が、保存修復の責任を持たされることになったのである。

プロジェクト開始から二年ほどは、なかなか実際の作業が立ち上がらなかったが、一九九七年から体制がととのい、パキスタン政府考古博物館局からスタッフを出してもらい、事務所や宿舎も整備して、保存修復の作業を進めることが出来るようになった。

遺跡では修復をモデル的に実施するのはもちろんであるが、現地の材料を活用し現地のマンパワーに見合った保存修復技術の開発、職人の訓練、地域開発への活用計画策定などを進めている。当初は、日本の施工方法や記録保存の進め方を持ち込んで失敗したこともあったが、それなりに実践的な回答を見いだしてきたつもりである。

幸か不幸か、二〇〇〇年からユネスコが第二フェイズ四カ年の予算をつけてくれて、今、遺跡ではより広い範囲の修復と、実験的な施工に取り組んでいる。昨年秋の訪パでは、日本から職人さんを招いて、漆喰塑像の現場保存に取り組んだ。これからもガンダーラ遺跡保存の「モデル」となるように努力をつづけていく予定である。

ただ、パキスタンでの作業はともかく、私の帰国中（訪日中？）も、プロジェクトは動いていて、遺跡の修復作業がうまく進んでいるかどうか、常にモニターしていなければならず、神経をすり減らすところだが、自分が発掘調査に加わった遺跡の保存修復をする。しかも、帰省気分で現地に行ける。こんな幸運に恵まれた者は、少ないだろう。そう自らに言い聞かせながら、この仕事に取り組んでいる。

プロジェクトはあと二年つづく。私の訪パごと、ご迷惑をおかけしている同僚の先生方、事務局の皆さんに改めて感謝申し上げるとともに、もう二年間のご堪忍をお願いいたします。

新任教官紹介

①所属学部・職名 ②所属学科・専攻分野 ③出身地・出身校
（学部、学科等別50音順）

SUMIO HAMADA
浜田 寿美男

①文学部　教授
②人間行動科学科 人間関係行動学講座
　発達心理学・法心理学
③香川県
　香川県立小豆島高校
　京都大学文学部
　同大学院文学研究科

無年齢を生きる

前任校には26年、四半世紀以上勤めた。ほとんど義理と成り行きでそうなったのだが、いざ居を移すとなると、これがけっこう大変。ミラン・クンデラのいう「無年齢」を生きてきたつもりでいたが、身体は確実に年を食っているらしい。

人はいつも自分の身体の内側から自分を生きる。だから自分が外から見てどれだけ老いているのか、ほとんど気づかない。だいいち自分の顔など、一日にせいぜい5分も見ればいいほうである。おまけに大学に勤めていれば、どうしても若い人たちと付き合うことが多い。自分の方で知らぬ間に仲間意識をもってしまったりして、おかげで自分も同じくらいの年のつもりでいる。人は○○歳という、外から与えられた年齢を生きてはいないのである。この「無年齢」の感覚がいつまで持続するのか、自分でもよくわからないのだが、いましばらくがそれが続くことを願っている。

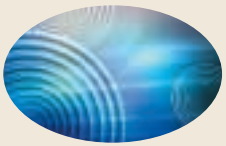
NAOKI SAIWAKI
才脇 直樹

①生活環境学部 助教授
②生活環境学科 アパレル科学講座
　信号処理、画像処理
　及びヒューマンインタフェース
③大阪府
　大阪府立茨木高等学校 大阪大学基礎工学部
　大阪大学大学院基礎工学研究科

奈良女子大学に着任して

毎朝、伝統を感じさせる優美で端正な正門と記念館を通るたびに感じる安らぎ、キャンパス周辺の古都の落ち着いた佇まいは、私が以前から望んでいた環境そのものでした。それが嬉しくて、学会等で一緒する友人・先輩達にそんな話をしていると、「で、研究環境はどうなの？他に同じ分野の研究者が少ないと浮いちゃわない？」と鋭い突っ込みを入れてくれました。

確かにある分野の常識は異分野の非常識ですが、そもそも情報関係と一口に言っても人によってハードな計測装置の製作から認知科学や数理工学、アーティスティックなCGまで幅広く、一見同じに見えても本質の全く異なる研究が少なくありません。一方、現実世界の多様な問題にどのような観点からアプローチしていくかが極めて重要であるという点からみれば、様々な価値観を持たれた研究者の方々とおつきあいさせていただける良い研究環境だと思います。教育に研究に微力をつくしますので、どうぞよろしくお願いします。



SAEKO KIKUZAWA
菊澤 佐江子

①生活環境学部　講師
②人間環境学科　生活経営福祉学講座
　老年社会学　保健医療社会学　高齢者福祉学
③大阪府
　府立北野高校
　京都大学教育学部
　米国インディアナ大学大学院社会学研究科

学際領域の魅力

私の専門領域は、老化・健康・福祉といった、いわゆる学際的研究領域です。元気に年をとることはどのように可能なのか。そもそも健康とは、またそれを規定する社会的要因は何か。心身の問題を抱えた人が地域で生活するために必要な社会条件は実現されているのか。福祉政策の方向性をどう考えればよいのか。こうした問題を、社会学をベースに、当事者の生活のミクロ・マクロの社会的文脈の中で日々考えてきました。

学際的研究領域には様々な魅力がありますが、その一つは、多様な学問との交流にあります。自己の成長に他者の存在が不可欠であるように、学問もまた、多様な学問との出会いの中で自らを意識し成長させていくものだとすれば、学際的研究領域は、その格好の場を提供していると思われます。その面白さを学生の皆さんに伝えられるよう、よりよい研究・教育に向けて励んでいきたいと願っております。

DAI NAGASAKA
長坂　大

①生活環境学部　助教授
②人間環境学科　住環境学講座
　建築設計
③神奈川県
　神奈川県立平塚江南高校
　京都工芸繊維大学工芸学部住環境学科

100年先の都市環境

地球の表面近傍のデザインをしている。もう少し分かりやすく言うと建築の設計をしている。そもそも実作をつくることが本分で、大学卒業後は約7年間実社会での設計活動に携わっていた。いわば修行期間みたいなものだ。最後に関わっていたのは大阪の「梅田スカイビル」だった。大学で教えることになるとは思ってもみなかったが、独立と母校での設計指導を同時に始め、以後14年が経過した。活動の両立について今まで以上に努力する所存である。

これまで福祉施設やオフィスビルの設計、都市計画等を手掛けてきたが最近個人住宅の依頼が多い。建築家という職能がふつうの人々にとって身近になってきたことは、少なくとも我々にとっては嬉しいことだ。一般市民（発注者）と建築家が環境や人間の生存について一定の哲学を共有できれば、日本の都市環境はもう少しマシになるだろう。しかし、後最低100年はかかる。

CHIEMI WATANABE
渡辺 知恵美

①大学院人間文化研究科 助手
②複合現象科学専攻 複合情報科学講座
　データベースシステム
③静岡県立沼津東高校
　お茶の水女子大学理学部
　お茶の水女子大学大学院
　人間文化研究科

初年度の抱負

昨年度お茶の水女子大学を卒業し、本大学大学院で働くことになりました。時折鹿も訪れるのんびりとした環境の中で教育および研究ができること、嬉しく思います。

私は学生時代とあわせて女子大歴10年目に突入することになります。この10年間の間にインターネットが爆発的に普及し、パソコン、ケータイ、デジタル家電と身の回りにコンピュータがあふれる時代になりました。この目覚しい発展の中で情報科学について学んでこれたこと、これからその成長の一端を担う研究を続けられることを幸せに思います。しかし、このような時代の中でもやはり、人間同士のface to faceのコミュニケーションは最も大事であると身にしみて感じています。様々な最新技術の中でもその技術におぼれることなく、さりげなく人の活動をサポートできるソフトウエアの研究にいそしみたいと思います。

CHIKA YOSHIHARA
吉原 千賀

①生活環境学部 助手
②人間環境学科 生活文化学講座
　家族社会学
③大阪府 大阪府立北野高等学校
　奈良女子大学 文学部
　同志社大学 大学院
　奈良女子大学 大学院人間文化文化研究科

「宝物」の側で立ちどまって

「あなた、奈良っていうんでさぁ、昔、天智、天武ときょうだいに天皇を譲ってたとか、歴史あるすっごい所に今いるんだから、もっと愛さなきゃもったいないと思うんだよ。宝物の側をず一っと素通りして歩いているような・・・」

素通りしてもうすぐ10年。このたび、母校奈良女で新たな第一歩を踏み出すことができましたことを、大変嬉しく思っています。学生として初めてこのキャンパスを歩いた時の新鮮な気持ちとともに、先の言葉がふと頭をよぎりました。

私は、高齢期のきょうだい関係について研究をしています。その調査の祭、ある高齢者のお話に思いがけず出た奈良ときょうだい関係とのつながり。そんな奈良の地で少し立ちどまって様々な「宝物」に触れつつ、仕事に研究に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。

EIKO UTSUNOMIYA
宇都宮（森田）詠子

①大学院人間文化研究科 助手
②共生自然科学専攻
　生物環境科学講座
　植物学
③東京都
　筑波大学附属高等学校
　京都大学農学部　東京大学大学院理学系研究科

新しい研究室で

生物学に携わる人は、アカデミックな場でも産業界でも大きな数を占めていますが、植物を扱っている人は必ずしも多くないのではないでしょうか？私が所属する研究室では主に植物を材料にしており、煌々と光の射す培養庫や培養室があります。植物で最も華のあるのは、やはり“花”の咲く植物ですが、研究室にはシロイヌナズナという小さな可憐な白い花を咲かせる植物が栽培されています。培養室の片隅ですが、そこだけ野原の一角のようです。花の咲きようもない藻類、いわゆる植物プランクトンも培養されています。これは可憐でないかというと、さもあらず。顕微鏡下で見るとレースのようなものもいて驚かされます。藻類は色も美しいものが多く、とりわけ藍藻は藍とも碧ともつかない、海のような色です。これからこの大学の学生さん達と植物の研究をしていくことを何よりも楽しみにしています。宜しくお願いします。

新任部局長紹介

①所属学部等・職名 ②所属学科等・専攻分野
（平成15年4月1日付）

NANAKO SHIGESADA
重定 南奈子

①理学部:教授 副学長（研究・企画担当）
②情報科学科 数理生物学

本年4月1日より研究・企画担当の副学長に就任いたしました。以来、二カ月が過ぎようとしていますが、不慣れなことばかりで日々勉強に追われております。大学は一年後の法人化を控えどの様な個性ある大学を目指すのか、また、学外に向けていかに魅力ある国際交流、広報、地域貢献を展開していくのか等々、緊急の課題が山積しております。学長の補佐役として、こうした課題のよりよい実現を図るべく微力を尽くす所存でございます。その為には、大学の構成員の皆様のご意見をよくお聞きし、有為な提言ができるよう努めたいと思っております。どうぞ皆様のご協力ご支援をよろしくお願いいたします。

HIROSI IGUCHI
井口 洋

①大学院人間文化研究科:教授 副学長（教育・厚生補導担当）
②比較文化学専攻 近世國文学

この4月、2年間務めてまいりました副学長（教育・厚生補導担当）に再任されました。皆さんもご承知のとおり、2月末国会に上程された「国立大学法人法（案）」が今国会で成立の見通しと報じられ、国立大学の法人化がいよいよ目前に迫っています。しかし、国立大学がどのような法人になろうと、大学が教育と研究の場であるということにいささかも変わりはありません。教育・研究の活性化を図るべく、大学は自らを変革する努力を怠ってはなりません。同様に、学生諸君も積極的に研鑽に励み、主体的にものを考え、新たに創造する力を養う姿勢を忘れないでいただきたい。伝統ある大学こそがいま、活気ある学生のフレッシュな感覚を求めています。

TERUYOSHI MATOBA
的場 輝佳

①生活環境学部:教授 附属図書館長
②生活環境学科 食品化学

ビジュアルな情報が満ち溢れた生活に慣れ親しんで、読書の機会が少なくなっているが最近の風潮です。読書の醍醐味を知らずにいるのは、誠に惜しい限りです。本を開いて文字に接すると、あなた方だけの知的世界に入り込むことができるのです。文字を通しての未知との遭遇は、知的感性を育み、あなた方を知的世界に誘ってくれるのです。何時でも何処ででも時間に追われることなく、ページを進めたりページを戻したりしながら・・・。本を開いて、耽美の世界に、人情の世界に、サイエンスの世界に、旅をしてみませんか。図書館には、あなた方が求める本が必ずあります。（趣味はコーラス）

HIROMASA INOUE
井上 裕正

①文学部:教授 文学部長
②国際社会文化学科 中国近代史

ちょっとした運命のいたずらから、文学部長職を務めることになりました。幸い平井前学部長のご尽力で学部が目指す方向性はすでにほぼ定まっていますので、それから逸れないことだけを肝に銘じています。現在、文学部は外部評価報告書の作成、中期目標・計画(案)の作成、教育coe対応の検討などに取り組んでいます。いずれも重い課題ですが、国立大学法人化も目前に控えていますから、昨年度末に学部の皆さんの協力で完成した『文学部自己点検・評価報告書』を基に、総力体制で取り組むことで文学部、ひいては大学全体の活性化につながればよいと考えています。

SEISHI NOGUCHI
野口 誠之

①理学部:教授 理学部長
②物理科学科 高エネルギー物理学

1953年8月1日、それまでの理家政学部から理学部と家政学部が誕生しました。理学部は今年の夏に満50歳になります。生まれた時は4学科に学生60名の小さな身体でしたが、その後どんどん大きくなり、今では5学科に185名の学生を擁する大きな身体に育ちました。来年からは国立大学が法人化されます。これまでとは異なった大学運営が要求されます。この節目の年に理学部長職を拝命し、緊張の日々を送っています。少子化を迎えるこれからの時代に、大きく育った身体を基盤とし、教育・研究のよりいっそうの充実を目指して、理学部の皆様と共に一生懸命頑張りたいと思っています。

平成16年度に向けての就職セミナーの日程について

今年も昨年同様厳しい就職状況が続くものと思われます。厚生課では、この厳しい就職環境に立ち向かえるよう次のとおり「就職セミナー」を開催します。
先輩に人気のあった「就職活動基礎ガイダンス」、「自己分析講座」、「エントリーシート攻略テスト」、「業種・職種別体験報告会」等のセミナーを企画しましたので、奮って参加してください。

●就職対策セミナー
平成15年7月11日
（16:20〜18:00 S218）
夏休みの過ごし方

●業種・職種別体験報告会
平成16年1月下旬〜2月中旬
大学会館 大・中集会室 数回
■講演「個々の能力・適性にあった職種、業種の選択方法とは…」
■企業で活躍する先輩との対談
■業種・職種（約20社）
電気機器、アパレル、薬品、化学、広告等

●東京での就職希望者への就職懇談会
平成16年2月中旬
佐保会東京支部
先輩の業種別・職種別体験報告会と東京での生活などについての講話

●就職対策・キャリア開発プログラム

■第1回 就職活動基礎ガイダンス（Ⅰ） 平成15年10月上旬	●就職活動全般の流れ・就職環境 ●質問カード提出
■第2回 就職活動基礎ガイダンス（Ⅱ） 平成15年10月中旬	●質問カードへの回答、その他質疑応答 ●就職活動での重要ポイント、必要な準備
■第3回 就職講座（Ⅰ） 平成15年10月中旬	●就職活動を始める前段階での現状確認 （対策への意識喚起〜）
■第4回 就職講座（Ⅱ） 平成15年10月下旬	●自己分析 ●自己PR
■第5回 エントリーシート攻略テスト（Ⅰ） 平成15年11月上旬	●業種・職種・企業研究 ●グループディスカッション
■第6回 就職講座（Ⅲ） 平成15年11月中旬	●ディベート ●グループプレゼン
■第7回 就職講座（Ⅳ） 平成15年11月下旬	●文書表現力養成
■第8回 就職講座（Ⅴ） 平成15年11月下旬	●就職動向報告●内定者による就職体験報告会 ●社会の第一線で活躍する女性体験談
■第9回 エントリーシート攻略テスト（Ⅱ） 平成15年12月上旬	●自己分析・企業研究等の準備検証 ●（成長度確認
■第10回 エントリーシートのフォローアップガイダンス 平成15年12月下旬	●最終チェックとしてのエントリーシートのポイント講座 （具体的な内容に）
■第11回 就職講座（Ⅵ） 平成15年12月下旬	●面接・マナー対策・模擬面接

★詳細については掲示します

日本育英会奨学生受領資格の確認について

日本育英会第一種・第二種奨学生は受領資格確認を年2回（5月、11月−平成11年度以前第一種・第二種奨学生のみ）厚生課学生生活係において行いますので、必ずこの確認を受けてください。教育実習等のやむを得ない事情により期間中に確認を受けられない場合は、事前に厚生課まで申し出るようにしてください。（確認には印鑑が必要）また、きぼう21プラン奨学生及び平成12年度以降に採用された第一種奨学生は、「奨学金継続願」を毎年秋に提出する必要があります。
手続を怠った場合、奨学金が廃止となりますので十分留意してください。
詳細については、掲示でお知らせします。

後期授業料免除について

経済的な理由により、授業料納付が困難で、かつ、学業優秀と認められる学生又は、学資負担者の死亡、風水害等による被災などの特別な事情がある学生の授業料免除申請に対して、審査のうえ、授業料の全額又は半額を免除できる授業料免除の制度があります。

本年度の後期授業料免除出願受付は、次の日程で行います。
■出願書類交付期間:7月1日（火）〜
■出願期間:9月16日（火）〜10月3日（金）
■出願書類交付・提出先:厚生課学生生活係

学生相談室について

●学生相談室は、あなたのマインドスペースです
学業や進路の不安、日常生活でこまったこと、対人関係など、さまざまな心配ごとについて一緒に考えましょう。
話を聞いてもらうだけでも、落ち着くこともあります。
相談室は、あなたの話にじっくり耳を傾けます。そのことで解決の糸口が見つかるかもしれません。
内容に応じて適切な人や機関を紹介することもできます。

●開室日及び開室時間
月曜日〜金曜日 午前10時〜午後5時
夏期休業中は月曜と木曜のみ開室
8月第3週と第4週、12月29日〜1月3日、入学試験日（前期・後期）は閉室します。
上記以外で閉室する場合は、構内掲示板や相談室前にその旨を掲示することによりお知らせします。
■学生相談室の場所は大学会館3階です。
TEL.0742-20-3925 Eメール soudan@cc.nara-wu.ac.jp

●担当スタッフ
■相談受付
金文子（月曜日・水曜日・金曜日）
岩井涼子（火曜日・木曜日）
■カウンセラー
皆藤靖子（臨床心理士）
竹村百代（臨床心理士）
■相談員
小川伸彦（教員）
和田恵次（教員）前期
高橋 智（教員）後期
米田守宏（教員）
相談の秘密は厳守します

奈良女子大学
〒630-8506 奈良市北魚屋西町
TEL0742-20-3235
発行日:2003年7月1日
発行:学園だより編集委員会
印刷所:共同精版印刷株式会社